

草食系投資の行方と日本経済



(12月のごあいさつ)

平成22年12月8日(水)

12月の沖縄は1年中で最も雨が少ない季節で、今年も晴れた日が続いています。

「銀行は大きな河のようなものだ。銀行に集まってこない金は、溝に溜まっている水やポタポタ垂れている滴と変わらない。折角人を利し国を富ませる能力があっても、その効果はあらわれない。」(第一国立銀行 株主募集布告「渋沢栄一 100 の訓言」日経ビジネス人文庫 渋澤健著 200 頁)

水が大河になれば、水車を回すことができるように、お金が集まれば、産業の原動力となって、国を発展させて、人々に利益という果実をもたらす。無駄に眠っているお金を集めて、人々のため国家のために活かさねばならない。その意味では銀行もファンドも同じ目的を持っている。

これは12月の沖縄事業再生研究会の講師を勤めていただいた渋澤健氏(コモンズ投信会長)の著書とお話の要点であり、講師の先生は他に中野晴啓氏(セゾン投信社長)と藤野英人氏(レオス・キャピタルワークス取締役CIO)であった。

運用のプロ3人が一緒に登壇してセミナー形式で個人の投資に対する誤解を解き、投資がなぜ必要なのか、業界の問題はどこにあるのか、日本を元気にするために、自分の生活を守るために普通の人も投資をすることを迫られる時代になった、というような議論であった。新しい日本を拓く、一滴一滴の水の滴を河に、長期投資、直販投信の考え方を実現するキーワード「草食系投資」を解説していただいた。

結局、銀行へ流れ込んでそのままになっているお金やたんす預金のお金、即ち眠っているお金がある。このようなお金は確かに産業や経済の世界で働いていない。それが日本には何10兆円もあるということだ。日本人自体の意識や考え方の変化に従って、お金を働かせるという意味が広まり長期投資へ向いて行くべきだと感じはした。確かに国内銀行の預金残高は増加しているのに、1990年代の半ばに500兆円を超えてあった貸出金の残高は400兆円程度と100兆円以上も減少している。勿論それは国債等で運用されているので一方的に眠っているとは言えないが。

「草食系投資」は何もそのような巨額な金額を一時に問題にしているのではない。今ははっきり見えないお金の流れるべき方向や将来に対する視野を広めよ、固定観念から解放されるべきだ、それが長期投資、直販投信につながるという趣旨のお話だ。しかし、まだ投信という壁が超えられないからだとは思いますが、そのような流れをどのように育てるのか、どのように爆発させるのか、キャズム(深い溝)を超えられるのか、滴は大河になれるのか、その前に銀行に目覚めて欲しいというのが正直な今の気持である。